



日本計量生物学会 ニューズレター

1. 巻頭言	- 1	お知らせ	
2. 浜田知久馬先生の訃報（庶務理事）	- 2	8. IBC2018（第 29 回国際計量生物学会）の	- 5
3. 2017 年度・2018 年度理事会議事録	- 2	お知らせ	
4. 試験統計家認定制度について	- 3	9. シリーズ「計量生物学の未来に向けて」	- 5
5. 2017 年計量生物セミナーの報告	- 3	10. 学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い	- 6
6. 2018 年度年会・チュートリアルのお知らせ	- 4	11. 2017 年非法人の決算報告	- 7
7. 2018 年度統計関連学会連合大会のお知らせ	- 5	12. 編集後記	- 7

1. 巻頭言「データサイエンスの生み出す力」

和泉 志津恵（滋賀大学データサイエンス学部）

2018 年、戌年、勢いのある年が明けました。みなさま、ご健勝のことと存じます。このたび、ご縁をいただき、巻頭言を述べさせていただきます。

まずは、国際計量生物学会の動きについて、紹介いたします。この 1 月に国際計量生物学会の会長が、Elizabeth Thompson 先生（Western North American 支部）から、Louise M. Ryan 先生（Australasian 支部）にバトンタッチされました。Ryan 先生は、ハーバード大学の生物統計学科長、国際計量生物学会の Eastern North American Region の会長、雑誌 Biometrics の co-editor 等を歴任され、現在、University of Technology Sydney に所属されています。大学院生時代にお世話になった Thompson 先生や Ryan 先生のもとで、活動をともにできることを光榮に思います。昨秋頃から Ryan 先生が新体制の調整を始められ、年頭にほぼ全ての Committee で数名づつの委員が交代になりました。委員は、支部から選出された評議員を中心に選ばれています。私が委員を拝命した Communication 委員会では、年明けから 4 つのタスク：1) IBS ウェブサイトのデザインの改修、2) 各支部のウェブサイトの標準化、3) IBS の SNS (Facebook, Twitter など) の充実、4) 若手の会員のためのネットワークの立ち上げについて議論を始めました。昨年までの議論で集められたデータを元に、タスクの優先順位が次々と決まっています。まさにデータサイエンス的なアプローチです。Ryan 先生と私たち委員との間の頻繁なメールのやりとりを追いながら、日本支部での取り組みを紹介し、意見を

述べています。この議論の結果は、今年 7 月にバルセロナで開催される IBC2018 で紹介されると思います。上記 4 つのタスクについて、会員のみなさまからのご意見を、対面やメール（Email: shizue-izumi@biwako.shiga-u.ac.jp）をとおして拝聴させていただきたいと存じます。

また、国際計量生物学会の事務局長も、Peter Doherty 氏に代わりました。昨年開催された事務局の 4 名のメンバーと支部の理事とのネット会議では、事務局の役割について説明を拝聴し、支部の活動の様子を伝えました。真夜中のネット会議（時差のため、日本は朝 1 時）でしたが、参加者の画像を拝見し、声を拝聴し、意見交換したことで、互いの距離が近づいた気がします。文字、画像、音声の 3 つのデータから、信頼や理解が生まれた瞬間でした。ただ、朝に強いが夜に弱い私の頭は、英語と日本語の間の翻訳でクルクルと回り続けました。今回は、アジア時間での開催であればと希望しています。

次に、オンライン大学講座 gacco「統計学 II：推測統計の方法」の状況について、報告いたします。日本統計学会が 2014 年に開講した gacco「統計学 I：データ分析の基礎」に続き、本学会と日本統計学会が共同で gacco「統計学 II」を 2015 年に開講しました。2016 年、2017 年に再開講し、受講者数は延べ 1 万 2 千人を超えます。第 5 週：適合度と分割表の解析を佐藤俊哉先生、第 3 週：統計的検定を和泉が担当しました。Coursera などの海外のオンライン大学講座の修了率は 10%未満のものが多い中、この「統計学

II」の初回修了率は20%を超えました。これは、統計の学習への需要の高まり、そして会員のみなさまとその周りの方々の熱心な受講のおかげだと解釈しています。この場をお借りして、講座へのサポートに深謝申し上げます。

最後に、滋賀大学データサイエンス学部に触れます。この秋学期に gacco「統計学 II」の教材を用いて、新入生 110 名のクラスで授業を行いました。実データを用いた演習を繰り返しながら、彼らは自身の学習成果データを元に、学習の過程を振り返り、次の課題での学びに向かっていきます。ただ、スマートフォン世代には、ノート PC の扱いに慣れるまで少し時間がかか

りそうです。彼らが、新しいものをどんどん吸収し自分のものにしてゆく様子は、とても自然であり、頼もしくみえます。データサイエンスの学問により、かれらのオリジナルな思考と行動が、医療、サービス、製造などの分野の新しい価値を創造する日が近いと確信しています。データサイエンスの生み出す力は、予想以上に強いものようです。これからも、データサイエンス学部の育成を温かい目で見守っていただければ、幸いです。滋賀の地から、会員のみなさまのご健康とご多幸を、お祈りしています。合掌。

2. 浜田 知久馬先生の訃報

本学会の代表理事の浜田知久馬先生（東京理科大学）が2017年12月21日に逝去されました。本学会への多大な貢献に改めて感謝申し上げます。

松井 茂之、寒水 孝司（庶務担当理事）

すとともに、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

3. 2017 年度・2018 年度理事会議事録

○2017 年度第 5 回対面理事会

日時：2017 年 12 月 16 日（土）10:00～11:40
場所：中央大学後楽園キャンパス 2 号館 9 階
2901 室（ラウンジ・セミナー室）
出席：大橋、浜田、大森、佐藤、菅波、
寒水、高橋、田栗、手良向、船渡川、
松山、三中、柴田（監事）
欠席：安藤、和泉、服部、松井、
柳川堯（監事）〈委任状 5 通〉

出席者と委任状により定足数が満たされていることを確認した後、大橋会長を議長として議案を審議した。

第 1 号議案 大橋会長からの報告

大橋会長から、2018 年度の事業計画が報告され、承認された。事業計画に IBC2018、発展途上国援助、学生参加補助を追加することになった。2018 年 2 月 15 日～16 日にインド(Pondicherry)で EAR-BC が開催されることが報告された。2017 年度の事業報告の監査を行うことが確認された。

第 2 号議案 庶務担当理事からの報告

松井 茂之、寒水 孝司（庶務担当理事）

庶務担当の浜田理事から、入退会状況と会員数、宛先不明者が報告され、入会者と退会者が承認された。

第 3 号議案 会報担当理事からの報告

会報担当の船渡川理事から、会報 125 号の発行報告（2017 年 11 月 20 日）と 126 号の発行予定（2018 年 2 月下旬）が報告された。旧学会（非法人）決算報告を記事に追加することになった。

第 4 号議案 編集担当理事からの報告

編集担当の三中理事から、「計量生物学」と「連合学会雑誌（Japanese Journal of Statistics and Data Science）」の投稿状況が報告された。

第 5 号議案 会計担当理事からの報告

会計担当の高橋理事から、2017 年度旧学会（非法人）決算、2017 年度現学会（法人）決算概況（11 月末時点）、2018 年度予算、旅費・謝金に関する規程案が報告され、承認された。柴田監事から、2017 年 12 月 4 日に実施した会計監査について特に問題がなかったことが報告された。田栗理事から、研究分科会活動費による活動として、Meet the Professor（仮案）が提案された。

第6号議案 企画担当理事からの報告

菅波理事から、2017年計量生物セミナーの開催状況(参加者数219名)、2018年度年会(特別セッション、チュートリアルセミナー)、2018年度連合大会シンポジウム(企画セッション)、2018年計量生物セミナーの準備状況について報告があった。

第7号議案 試験統計家認定担当理事からの報告

手良向理事から、責任試験統計家第1回・第2回過渡的措置の応募状況、可否の連絡方法、今後の予定と認定のための講習会の予定が報告され、承認された。第1回過渡的措置については、応募者に対して不公平が生じないように配慮することになった。実務試験統計家の認定条件について、議論がなされた。

次回以降の理事会の予定

日時: 2018年3月3日(土) 13:00~15:00

場所: 中央大学後楽園キャンパス

日時: 2018年3月29日(木) 昼(2018年度年会開催期間中)

場所: 統計数理研究所

○2018年度第1回 e-mail 理事会

2018年1月8日から1月10日にかけて e-mail 理事会を開催した。

議案1) 第1回過渡的措置による責任試験統計家の審査結果および第2回申請の特例措置について

議案2) 庶務理事体制について

審議の結果、各案は理事会で承認された。

4. 試験統計家認定制度について

手良向 聡, 安藤 友紀, 菅波 秀規 (試験統計家認定担当理事)

2017年4月に「試験統計家認定制度」を開始しました。この制度では、臨床研究の統計的デザインと解析・統計家の行動基準に関し深い知識を有し、実践している者を試験統計家として認定します。臨床研究の科学的かつ倫理的な質を高めることで人々が有効かつ安全な医療の恩恵を受けること、併せて計量生物学の進歩と発展を目指しています。規則・細則等については、学会HPをご覧ください。

「過渡的措置(第1回)」において21名の責任試験統計家を認定し、「過渡的措置による責任試験統計家認定申請(第2回)」の受付を1月末に

終了しました。今後の予定は以下の通りです。なお、2018年度の認定申請のためには講習会への参加が要件です。

・2018年3月31日(土) 統計数理研究所: 講習会(申込締切: 2018年3月12日(月))

・2018年4月: 実務・責任試験統計家の審査基準公開

・2018年5月~7月: 2018年度実務・責任試験統計家認定申請受付

・2019年3月: 2018年度実務・責任試験統計家認定

5. 2017年計量生物セミナーの報告

大森 崇, 菅波 秀規, 田栗 正隆, 船渡川 伊久子 (企画担当理事)

2017年12月15日に計量生物セミナー・臨床統計シンポジウム『ICH E9 (R1)「臨床試験におけるestimandと感度解析」について』(オーガナイザー: 安藤友紀(医薬品医療機器総合機構(PMDA)), 佐藤俊哉(京都大学), 菅波秀規(興和))が、日本計量生物学会・京都大学臨床統計家育成コースの主催、医薬品医療機器総合機構・日本製薬工業協会との共催で、TKPガーデンシティ PREMIUM 神保町プレミアムボールルームにおいて開催されました。プログラムは以下の通りです。

13:00~13:05 開会のあいさつ オーガナイザー 菅波秀規(興和)

第1部 司会 佐藤俊哉(京都大学)

13:05~13:45 ICHE9(R1) ステップ2文書の紹介 安藤友紀(PMDA)

13:45~14:25 US Perspective Thomas Permutt (US Food and Drug Administration)

14:25~15:05 EU Perspective Frank Bretz (Novartis)

第2部 司会 土屋悟(大日本住友製薬), 田中司朗(京都大学)

15:25~16:25 パネルディスカッション 安藤友紀(PMDA), Thomas Permutt (FDA), Frank Bretz

(Novartis), 王玫 (Mey Wang, 醫薬品査験中心), 菅波秀規 (興和), 田栗正隆 (横浜市立大学) 16:25~16:50 質疑応答

参加は 219 名でした。セミナーでは、まず、安藤氏から ICH E9(R1)ステップ 2 文書についての概要紹介がなされました。ランダム化比較試験の特徴として、比較可能性を保った群間の比較ができる利点がありますが、治療効果の説明と解釈を複雑にする特定の事象(中間事象)が発現しうる場合、それを十分考慮せずに統計解析の手法等を選択すると、推定される治療効果に曖昧さや試験目的に対する不整合が生じうること、それらを整合させるためのフレームワークと estimand の概念が伝えられました。次に、Permutt 氏から、有害事象や治療の有効性欠如に伴う中止例が存在する状況で、従来の ITT 解析

に基づく治療方針ストラテジーや MMRM 等の MAR を仮定した仮想ストラテジーの限界が述べられました。また、そのような状況下で用いうる手法として操作変数法やトリム平均の比較などが紹介されました。次に、Bretz 氏から ICH E9(R1)ステップ 2 文書に紹介されている仮想例を用いて、中間事象に対応するための 5 つのストラテジーの考え方が述べられました。パネルディスカッションでは、治療下ストラテジーにおいて誤った結論が導かれる状況、主要層ストラテジーの有用性や一部の集団において評価することに起因するラベリングの問題、estimand の選択によって感度解析の重要性に違いが生じうることの指摘など、活発な議論がなされました。

6. 2018 年度年会・チュートリアルのお知らせ

大森 崇, 菅波 秀規, 田栗 正隆, 船渡川 伊久子 (企画担当理事)

2018 年度日本計量生物学会年会を 2018 年 3 月 29 日(木)午後および 3 月 30 日(金)に統計数理研究所にて開催します。また、3 月 29 日(木)午前同一会場にてチュートリアルを実施します(応用統計学会と共催)。本年会は応用統計学会の後援で実施され、両学会員は本年会、3 月 29 日(木)のチュートリアル、および 3 月 28 日(水)開催の応用統計学会年会に、会員価格で参加できます。大会スケジュール等の詳細は年会 HP をご覧ください (http://biometrics.gr.jp/annualmtg_2018/index.html)。なお、年会期間中に日本計量生物学会総会・学会賞受賞式、理事会、および評議員会を開催します。

年会・チュートリアルの会場および参加要領
会場 統計数理研究所 <http://www.ism.ac.jp/>
〒190-8562 東京都立川市緑町 10-3

参加費

事前申込:申し込み期間 2018 年 1 月 30 日(火)~2 月 28 日(水)

	年会	チュートリアル
本学会員	2,500 円	2,500 円
応用統計学会員	2,500 円	2,500 円
非会員	4,500 円	4,500 円

学生(会員, 非会員とも)	1,000 円	1,000 円
---------------	---------	---------

当日申込

	年会	チュートリアル
本学会員	3,000 円	3,000 円
応用統計学会員	3,000 円	3,000 円
非会員	5,000 円	5,000 円
学生(会員, 非会員とも)	1,000 円	1,000 円

特別セッション: 3 月 30 日(金)午後
セッション名:「統計コンサルテーション」
オーガナイザー: 大庭幸治(東京大学)
演者: 大庭幸治(東京大学), 三嶋秀行、室谷健太(愛知医科大学), 田中紀子(国立国際医療研究センター), 飯島弘章、大野浩太、伊藤陽一(北海道大学)

チュートリアル: 3 月 29 日(木)午前
テーマ:「適応的デザインとその応用」
オーガナイザー: 星野崇宏(慶應義塾大学)・田栗正隆(横浜市立大学)
講師: 星野崇宏(慶應義塾大学)・田栗正隆(横浜市立大学), 本多淳也(東京大学), 平川晃弘(東京大学)

7. 2018 年度統計関連学会連合大会のお知らせ

山本 英晴, 安藤 宗司 (統計関連学会連合大会プログラム委員会)

2018 年度統計関連学会連合大会は中央大学後楽園キャンパスにおいて、2018 年 9 月 9 日(日)～9 月 13 日(木)の日程で開催されます。チュートリアルセッション、市民講演会、企画セッション(4月上旬に締め切りを設定予定)、コンペティションセッション、ソフトウェアセッ

ションなどを予定しています。講演数が増えたことから、今年度は本大会の日程を 4 日としています。一般講演申込の締め切りは今のところ 5 月下旬の予定です。奮ってご参加をお願いいたします。

8. IBC2018 (第 29 回国際計量生物学会)のお知らせ

佐藤 俊哉・服部 聡 (国際担当理事)

2018 年 7 月 8 日から 13 日にバルセロナ国際会議場で開催予定の第 29 回国際計量生物学会のオンラインレジストレーションがオープンしました。

<http://2018.biometricconference.org/>

レジストレーションは IBC ウェブサイトから行いますので、みなさんの IBC ユーザー名とパスワードでログインする必要があります。

9. シリーズ「計量生物学の未来に向けて」 学際的にデータを活用して社会に還元したい

伊藤 ゆり (大阪国際がんセンター)

はじめに

大阪国際がんセンター(旧・大阪府立成人病センター)で生物統計職として主任研究員をしています。臨床研究を行う医師・スタッフに対し、生物統計面でのサポートを行っています。自身ではがん登録資料をはじめとした統計資料を用いて、がん対策に役立てる研究を行っています。

がん登録との出会い

大阪大学大学院に進学し、大野ゆう子教授の研究室でがん登録資料を用いた生存解析に取り組みました。地域がん登録は対象地域の全がん患者のデータを登録する悉皆調査であり、罹患の動向や、がん患者の生存率の計測が可能です。登録制度は国際的に標準化されているため、国際比較も可能な疾患データベースです。研究を始めた当初、日本のがん登録データの収集は一部地域でのみ行われており、海外と比べて活用が十分ではありませんでした。そのような中、がん登録に従事する疫学の先生方にご指導いただきながら、海外の統計手法を見よう見まねで適用するところから始まりました。

英国でのがん対策への活用

大学院博士課程の頃に、5 か月間ロンドン大

学衛生学・熱帯医学校のがん生存解析グループに留学をする機会をいただきました。このグループではがん患者の生存率を国際比較する共同研究 CONCORD study やがん患者の生存率における社会経済格差に関する研究が行われていました。このグループでは、最新の統計手法を用いて、Missing data や Competing risk などによる bias を減らし、比較可能性を高めるために、優秀な生物統計学者が世界中から集まっていました。外部研究者とのコラボレーションもさかんで、毎年、世界中のがん登録関係者を対象としたがん生存解析のショートコースが行われています (<http://csg.lshtm.ac.uk/short-course/>)。

このグループで行われた研究成果は英国におけるがん対策でも引用され、例えば、2000 年の National Cancer Plan において、がん患者の生存率における社会経済指標による格差の縮小について課題設定がなされました。研究が実際の政策に活用され、役立っているのを目の当たりにし、日本でも同様のことをしたいという思いで帰国しました。

科学的根拠に基づくがん対策に向けて

博士課程修了後は、大阪府立成人病センター調査部(現在のがん対策センター)で大島明先生、津熊秀明先生のご指導の下、大阪府や国の

がん対策にかかわる仕事に従事しました。がん罹患率・死亡率の動向や、各対策によるがん死亡率減少効果の試算などを、大阪府の行政の担当者の方とともに行ってきました。

米国やカナダなどでは、**Microsimulation** という手法を用いて、がん対策の優先順位付けや各政策決定を行っています（**CISNET, OncoSim** など）。例えば、あるがん検診を導入するかは **RCT** による死亡率減少効果で判断されますが、その後、検診の対象年齢や頻度などは、再度 **RCT** をするのではなく、**RCT** の結果や実際の検診データを活用し、**Microsimulation** によってさまざまなシナリオの結果を予測し、がん検診の利益と不利益のバランスや死亡率減少の効率性を鑑みて政策決定がなされます。2007年にこのような研究を知り、日本でも同様の研究を行うべく、大阪大学の祖父江友孝教授を中心とした勉強会からスタートした研究班が立ち上がり、現在、大腸がん検診に関する **Microsimulation model** の第一報がまとまりつつあります。

このような研究は疫学者だけでは難しく、生物統計、数理統計の専門家の力が必要となります。現在、数理統計専門の札幌医科大学の加茂憲一先生や同僚の福井敬祐氏とともに取り組んでいます。モデルの構築には臨床医の観点や、臨床のデータベースも必要です。費用対効果の研究の際には医療経済の専門家と協働します。このように様々な分野の方と協働する学際的な研究に大変面白みを感じています。**Microsimulation** は柔軟な課題解決に適しており、学問的にも面白みがあると同時に、社会に役立つ研究方法です。現在、一緒にこの研究に取り組んでくださる方を探しています。機械学習とも親和性の高い分野ですので関心のある方、お声掛けください。

10. 学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い

本学会雑誌である「計量生物学」に会員からの積極的な投稿を期待しています。会員のためになる、会員相互間の研究交流をより一層促進するための雑誌をめざすため、以下の5種類の投稿原稿が設けてあります。

1. 原著 (Original Article)

計量生物学分野における諸問題を扱う上で創意工夫をこらし、理論上もしくは応用上価値ある内容を含むもの。

がんの社会経済指標による格差の要因分析

昨今、住んでいる地域や職業、収入で健康のアウトカムに格差が生じている「健康格差」が問題になっています。留学先のロンドン大学衛生学・熱帯医学校の **Bernard Rachet** 教授との共同研究で、がん患者の生存率における社会経済指標による格差の要因分析を行っています。がん患者の生存率に格差があることは既にわかりました (**Ito Y, et al. Acta Oncol. 2014**)。そこで、格差が生じる要因を探り、その寄与度を明らかにしたいと思っています。寄与が大きい要因を特定し、介入することで格差縮小への取り組みを行うためです。計量生物の分野でも話題の **Causal inference** の **Mediation analysis** を用いた手法を適用します。現在、勉強中ですがなかなか難解で、こちらにも専門家の力を借りる必要があります。この研究では居住地の情報を用いて社会経済指標を与えるため、地理学者の立命館大学の中谷友樹教授とも共同研究しています。実際の格差解消への取り組みとなると、さらに多くの分野の研究者や行政の方と取り組むこととなります。

おわりに

がん登録のような悉皆性の高いデータは国や地域の政策決定を検討する上で重要な情報源ですが、複数データベース間のリンケージなどのインフラが整っていないため、十分に健康政策に活用されていません。様々な分野の皆さんとともに、学際的にデータを活用し、その重要性を示していきたいと思います。これまで、ご指導いただきました先生方に感謝を申し上げますとともに、これから一緒に研究してくださる皆様との出会いを楽しみにしています。

服部 聡, 三中 信宏 (編集担当理事)

2. 総説 (Review)

あるテーマについて過去から最近までの研究状況を解説し、その現状、将来への課題、展望についてまとめたもの。

3. 研究速報 (Preliminary Report)

原著ほどまとまっていないがノートとして書き留め、新機軸の潜在的な可能性を宣言するもの。

4. コンサルタント・フォーラム (Consultant's Forum)

会員が現実に直面している具体的問題の解決法などに関する質問。編集委員会はこれを受けて、適切な回答例を提示、または討論を行う。なお、質問者（著者）名は掲載時には匿名も可とする。

5. 読者の声 (Letter to the Editor)

雑誌に掲載された記事などに関する質問、反論、意見。

論文投稿となると、「オリジナリティーが要求される」、「日常業務での統計ユーザーにとっては敷居が高い」などを理由に二の足を踏む会員が多いかもしれませんが、上記の「研究速報」、「コンサルタント・フォーラム」は、そのような会員のために設けられた場であり、活発に利用されることを特に期待しています。いずれの投稿論文も和文・英文のどちらでも構いません。

2004年度から学会に3つの賞が設けられ、その一つである奨励賞は、「日本計量生物学会誌、Biometrics, JABES に掲載された論文の著者（単著でなくても第1著者かそれに準ずる者）で原則として40歳未満の本学会の正会員または学生会員を対象に、毎年1名以上に与えられる賞」です。

11. 2017年非法人の決算報告

2017年3月16日に解散された非法人の清算および法人（一般社団法人 日本計量生物学会）への移管が完了し、2017年12月4日に監事による

最近、履歴書の賞罰欄に「なし」と書くと公募の際に引け目を感じるくらいです。ここ数年、「計量生物学」に掲載された論文が受賞しており、今後もこの傾向は続くものと見込まれます。特に、上記の条件を満たす方は、ご自身の研究成果の投稿先として「計量生物学」を積極的に検討されてはいかがでしょうか。

また、特に最近の計量生物学の研究に関しては、英語の総説はあっても、日本語で書かれたよい総説・解説が存在しない分野やテーマが多く見受けられます。日本語での総説論文は、多くの会員に有益な情報を提供すると同時に大変貴重なものになりますので、その投稿は大いに歓迎されます。これまで著者から論文掲載料をいただいていたが、学会員が筆頭著者の場合は無料とすることになりました。2013年発行の34巻1号からこれを適用しています。

なお、論文の投稿に際しては、論文の種類を問わず、雑誌「計量生物学」に記載されている投稿規程をご参照ください。会員諸氏の意欲的な論文投稿を心よりお待ちしております。

高橋 邦彦、和泉 志津恵（会計担当理事）

会計監査を実施しましたので、別添え資料にありますが通り、ご報告いたします。

12. 編集後記

2018年が始まりました。2017年は会長となりました浜田知久馬先生に巻頭言をご寄稿いただきましたが、これから学会をさらに牽引していただくというところで、あまりにも早い訃報となりました。謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈りいたします。

最近、データサイエンスという言葉聞く機会が増え、何か新しい流れを感じています。3月には東京で年会、7月にはバルセロナでIBC2018が開催されます。今年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

（青空の広がる立川より）

日本計量生物学会会報第126号
2018年2月17日発行

発行者：日本計量生物学会
発行責任者：大橋靖雄 編集者：船渡川伊久子、松井茂之

2017年度決算報告

(2017年1月1日～2017年7月7日)
[単位:円]

〔一般会計〕

収入の部

項目	予算額	実績	前年度実績	備考
・前年度繰越金	7,800,000	7,831,340	7,617,606	
・会費収入	0	31,000	5,199,000	2017年度
国内正会員		(18,000)	(3,192,000)	国内正会員3名分
学生会員		(0)	(0)	
国際正会員		(13,000)	(1,978,000)	国際正会員1名分
シニア会員		(0)	(0)	
名誉会員		(0)	(29,000)	
・賛助会員	0	0	270,000	
・会費未収金回収	0	115,500	286,000	未納金も含め、法人に納める
・会費前納金	0	12,000	26,000	国内正会員2名分
・論文掲載料	0	0	42,000	
・雑誌広告	30,000	30,000	60,000	37巻2号
・ジャーナル売上	4,000	4,000	10,000	37巻2号
・著作権料	0	0	35,688	
・年会	535,000	748,000	601,500	※1
・チュートリアル	400,000	705,905	114,426	※2
参加費等	(400,000)	(683,000)	(0)	
応用統計	(0)	(22,905)	(114,426)	
・講演会等	0	0	0	
・雑費	0	181,689	53	利息、法人会計より(税務書類作成代行費、法人税の清算)
合計	8,769,000	9,659,434	14,262,273	

※1 予算根拠は企画理事からの数字を積算

実績参加者数253名(正会員182名、後援学会員0名、学生22名、非会員49名)。

※2 予算根拠は企画理事からの数字を積算

実績参加者数225名(正会員126名、後援学会員27名、学生17名、非会員55名)

応用統計学会との共同開催。2017年度は計量生物学会が開催主体。全体収入から全体支出の差額分を両学会で折半。

4月以降の調整額のため22,905円の返金。

支出の部

項目	予算額	実績	前年度実績	備考
・本部送金	0	0	1,987,135	3月までは無し
17.4		(0)	(1,592,213)	
17.8		(0)	(221,270)	
17.12		(0)	(173,652)	
・IBC2016会員発表補助	0	0	300,000	該当なし
・EAR-BC2015会員発表補助	0	0	199,352	該当なし
・印刷費	427,000	219,618	984,636	37巻2号
ジャーナル	(400,000)	(193,158)	(930,636)	37巻2号
電子ジャーナル	(27,000)	(26,460)	(54,000)	同上
ニュースレター		(0)	(0)	
・通信費	52,000	208,853	313,168	年会費徴収+学生会員確認(630名)送料
・人件費	850,000	850,000	850,000	
事務費	(850,000)	(850,000)	(850,000)	シンフォニカの2016年度分
アルバイト	(0)	(0)	(0)	
・会議費	154,000	77,725	508,329	監査謝金、理事会交通費
・学会賞	300,000	229,861	167,484	2017年度学会賞は、非法人学会で支出
・消耗品代	10,000	138,432	97,801	封筒代(年会費徴収+学生会員確認用)
・雑費	10,000	56,208	124,807	振込手数料、会費払出料金等
・連合理事会費	0	0	30,000	法人移行後に支払い(4月)
・連合大会案内印刷	0	0	0	
・年会	856,000	658,365	300,458	
年会運営費	(556,000)	(658,365)	(255,156)	
学生会員発表補助	(300,000)	(0)	(45,302)	
・チュートリアル	280,000	513,503	0	
謝金、印刷費等	(160,000)	(298,196)	(0)	
応用統計	(120,000)	(215,307)	(0)	
・計量生物シンポジウム旅費等	0	0	0	
・ホームページ管理	320,000	228,960	334,800	2017年会Web改修(19万)、1～2月のメンテナンス(2万円)
・名簿作成費	0	0	0	
・講演会等	0	0	0	
・研究分科会活動費	0	0	0	
・法人化費用	0	181,685	232,963	税務書類作成代行費、2016年度法人税
・法人準備金	1,000,000	1,000,000		法人口座へ寄付
・予備費	4,510,000			
・次年度繰越金		5,296,224	7,831,340	法人への移行(2017年7月7日)
銀行		(499,058)	(395,531)	
郵便局		(4,786,010)	(7,434,610)	
現金		(11,156)	(1,199)	
合計	8,769,000	9,659,434	14,262,273	

〔特別会計〕

収入の部

項目	予算額	実績	前年度実績	備考
・前年度繰越金	2,400,000	2,487,096	264,570	
・EAR-BC	0	0	1,458,203	
・特別会費	0	0	231,000	
会費納入時	0	(0)	(34,000)	
セミナー・講演会等開催時	0	(0)	(197,000)	
・特別号売上	0	0	6,000	
・セミナー	0	0	866,676	
・雑費	0	17	67	
合計	2,400,000	2,487,113	2,826,516	

支出の部

項目	予算額	実績	前年度実績	備考
・EAR-BC参加国地域への補助	0	0	0	
・途上国援助	0	0	335,910	
・特別号発行	0	0	0	
特別号	0	(0)	(0)	
電子ジャーナル	0	(0)	(0)	
・送料	0	0	0	
特別号	0	(0)	(0)	
・セミナー	0	0	3,240	
・雑費	0	0	270	
・次年度繰越金	2,400,000	2,487,113	2,487,096	法人への移行(2017年6月30日)
合計	2,400,000	2,487,113	2,826,516	

会計監査報告

一般社団法人 日本計量生物学会 殿

2017年1月1日より2017年7月7日(移行完了時)までの会計経理を監査した結果、
会計報告の通り相違ないことを認めます。

2017年12月4日 監事




